



## わたしと「ご和讃」

母からも、つた「ご和讃」。父が亡くなったのは、わしが丁度小学一年生の夏でした。それから2~3年のあいだは母に厳しく育てられました。

毎朝5時に起こされ、本堂で母と一緒に「お正信偈和讃」の練習をさせられました。丁度そのころ、正信偈の新節と言うのが制定されて、そのレコードが、ご本山から地方の寺々に送ってきたのだと思います。（現在「行譜」といっている節です）。そのレコードをかけながら毎朝練習するのでした。その「正信偈和讃」の練習が終わると、今度はお説教の稽古です。当時、説教は一筋五十秒ほどの高さの「高座」の上からすることになっていました。その高座の上から、母に教えられた通りの「ことば」を大きな声で唱えるのです。もとと沢山あったような気がしますが、そのうちの2~3句しか思い出せません。

人ガ悪ナイ ワガ身ガワルイ  
ヤブレ車ノ 我が（輪ガ）ワルイ

聞イテモ聞イテモ ナントモナ  
ナントモナイノガ オラジャユエ  
オラガアルユエ 親ガアル

落シハ センゾ・

父を亡くした翌年かに母は「得度」して僧侶になり寺・門徒のおつとめをしました。

夕刻、小柄の母は小学校の校庭で自転車の

練習に励み、夜にはジョンと肉弾という大柄な犬をお供につれて門徒の家の報恩講などに回っておりました。（実家のおじいチャンの応援。役僧と呼んだ僧侶見習いもいて手伝ってくれてはいたものの）随分苛酷な生活だと思います。そのほか昭和9年には境内の池を埋め立て墓を立て、庫裡（寺の住居）新築計画も進めなければなりませんでした。そ

のさなか、わたし二年生のおわりごろ、眼病で休学。福知山の叔父夫婦に預けられ彼の地の医院に通うことになりました。母は週に一度は見舞いにきてくれましたが、いよいよ一年定期間盲目施術を行う日、立ち会いに来た母は、私をオンブして約4キロ半の道を叔父の寺まで帰りました。その道々繰り返し子守唄のように詠ってくれたご和讃。

「弥陀成仏のこのかたは 今に十劫を経たまえり 法身の光輪きわもなく 世の盲冥を照らすなり」

母はそのときなぜこのご和讃を唄ったのか。ずっとあとになって思い当たったのですが、「世の盲冥」とは、明日から目が見えなくなるてしまうこの子。しかしこの子のために如来様と一緒に、母であるわたしとともに、慈悲の光の輪なかに照らし見守り続けるであります。お念佛もうし人生大切に生きなさい。

お正信偈和讃の第1首目のこのご和讃」でありました。

## 三月二十一日（金）

### 春分の日

八日（土） 渋谷重夫宅 七回忌

中山隆雄宅 二五回忌

出石但東仏教会 役員会

九日（日） 田結庄宅 七回忌

一〇日（月） 横山宅 忌明法要

一一日（火） 仲義宅 忌明法要

一二日（水） 中田宅 忌明法要

一三日（木） 足立幸夫宅 三回忌

一四日（金） 岩出酒一郎宅 二五回忌

一五日（土） 出石組 臨時組内会

一六日（日） 岩出酒一郎宅 二五回忌

一七日（月） 幸田組 七回忌

一八日（火） 田中組 七回忌

一九日（水） 田中組 七回忌

二〇日（木） 田中組 七回忌

二一日（金） 田中組 七回忌

二二日（土） 田中組 七回忌

二三日（日） 田中組 七回忌

二四日（月） 田中組 七回忌

二五日（火） 田中組 七回忌

二六日（水） 田中組 七回忌

二七日（木） 田中組 七回忌

二八日（金） 田中組 七回忌

二九日（土） 田中組 七回忌

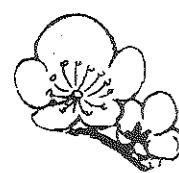
二〇日（日） 田中組 七回忌

じつと耳を澄ますとかすかに春の足音が聞こえる気がする今日この頃。いよいよ勝林寺の本堂もあたたかな春を迎える日がやつてきました。この日は、二つの法要が勤まります。誘い合わせてお参りください。お待ちしています。

三月 勝林寺 予定

## 春の彼岸会法要

時間 午後二時より  
内容 お勤め「正信偈」  
内 容 法話 勝林寺住職



二六日（水） 兵庫教区組長会  
三〇日（日） 木村和則宅 七回忌  
森井 進宅 五〇回忌



（敬称略）

葬儀
二月二十四日
檀見 湯口時男様 五十三才

## 最初のわ葬式

十方微塵世界ノ 念仏ノ衆生ヲミソナワ  
シ 摂取シテ捨テザレバ 阿弥陀ト名ヅケタ  
テーマツル

このご和讃は『淨土和讃』のなかの「阿弥陀經和讃」です。私が一番始めに覚えさせられたご和讃です。

昭和十年の夏のことですから、母が亡くなつてすぐ後のことです。室埴村和屋という在所でお葬式がありました。寺の経代をしてくださつていた方の葬式でした。代わつて勤めていたたく方も都合もつかなかつたのでしお私が執り行うことになりました。

生まれて最初のことです。前の晩、役僧さんに「私が付いていますから」ということであらかたのことを教えてもらいました。

母から習つた『お正信偈』とは節が全く違います。とにかく座つていなさい、ということで祖母に付き添つてもらつて行きました。まともに勤まるはずもありません。そのとで和讃だけを覚えているのも不思議です。「十方微塵世界の」。微塵とは例の木端微塵(こつばみじん)。粉々に切り碎いた微細な木屑のような世界。

わたしたちのこの世界にも、星くずのよう

に色々ものの世界があります。虫の世界・魚の世界、木や花の世界にも、そしてわたしには

未知の世界が(いのちの世界)一杯あるはずです。いまのこの私にはその全部が見えていないだけです。しかし如来様は、十方上下大小無量の微塵の世界が全部見えているので

す。聖なる人も劣悪な人も、淨なる人も汚れた人も、賢人も愚痴なもののが世界も全て見えています。念仏する人も、念仏を誹謗する人も。すべてみそなわす。憐憫くださるのです。

摂取シテ捨テザレバ

親鸞さまは「摂取」の文字の左に、細かな字

で次のように左訓をつけておられます。

ヒトタビトリテ長ク捨テヌナリ

モノノ逃グルヲ追ワエトルナリ



父が死んだ翌年、その墓を寺の境内の池を埋め固めたて大きな墓石を建てた時の記念写真が残っています。沢山の親族がその前にならんでいます。その翌年に死んだ弟もお行儀よく一番前にお数珠を持つて並んでいます。

そのとき私ひとりは何故か駄々をこねて逃げ回っていました。困った母は、その子を追いかけまわしてようやく遺族親族の一番正面に連れ戻しました。そのときは今もハッキリ覚えていました。このご和讃に出会う度にわたしはそれを思い出します。母の面影とそのこころを。

ほとけさまの「慈悲」とは、そのようなこどだと。

「慈」はマイトリー。「悲」はカルーナ。

このサンスクリット(古い印度の仏教語)。

中国語では「与樂」と「拔苦」と訳されています。サンスクリットの原義では「友として

己能難破無明闇 貪愛瞋恚之雲霧 常覆眞實信心天」(阿弥陀如來の光は、常に私たちを照らし続けています。しかし、我々から生

まれる貪欲や欲望から、その光を遮る雲霧を作ります。)

今遇う光は、どのような光であつても、

自分自身へと導いてくださる、自分自身へと帰させてくださる光なのです。折戸沙紀子

^法語カレンダー三月ノ紹介

帰<sup>ガタ</sup>つてやくべ<sup>セカイ</sup>世界<sup>セカイ</sup>は

今遇<sup>ハコ</sup>う光<sup>ル</sup>によつて

どすん

卒業式で思い出すお話です。小学校で

は、卒業を前にした子供たちから、文集に載せるメッセージを求められます。私もたくさん書かせていただきました。毎年の事なので、

日頃から心に残った言葉をメモしておいたり、他の人の文章を参考にしたりしますが、子どもたちの心に残るようなことは、なかなか書けません。そんな中で、ある同僚が書いた文

は、あとにも先にも(これに勝るものはない)と今でも思っています。「卒業式、それは、君たちがこの学校で六年間学んできたことの集大成です。期待しています。」どんどん心に響きました。重く価値あるひとと言であると思いました。

時間にすれば二時間ほどの卒業式ですが、確かに、主役である卒業生が、六年間で

学んできたすべて力を精一杯發揮するのになれば「いい卒業式」にはなりませんし、脇役である在校生や来賓、先生方が「いい卒業式」にはしてくれません。子どもたちは、この後、何度も卒業式を迎えます。そのたびに

(その日一日だけが大切なではなく、毎日の積み重ねこそが大事なのだ)とこの言葉を

思い出すにちがいありません。

ふと思ひます。私にも、これを読んでくだ

さつている皆さんにも、卒業式は、多分もう

めぐつてしませんね。でも、人生の卒業式で

あるお葬式はみんなにめぐつきます。私の

歩む道の集大成です。主役である私には、当

日は何もできませんが、脇役である家族や友

人や近所の方が「いいお葬式」にしてくださ

るといいですね・・いたいたいのちの尊さ

を知り、今を大切に生きていくます。(坊守)